

【原 著】

L-café（ソーシャル・ラーニング・スペース / 言語カフェ）における  
「スチューデント・ティーチャー」制度についての検証

宇塚 万里子 大年 順子

Examining the Student Teacher System at the Social Learning Space, the L-café  
– Students' Perceptions of Students Teachers and ST Experience of Peer Teaching –

Mariko UZUKA, Junko OTOSHI

2014

岡山大学教師教育開発センター紀要 第4号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.4, March 2014

原 著

# L-café (ソーシャル・ラーニング・スペース / 言語カフェ) における 「スチューデント・ティーチャー」制度についての検証

宇塚 万里子\*<sup>1</sup> 大年 順子\*<sup>1</sup>

平成 25 年 5 月に岡山大学に新規オープンしたソーシャル・ラーニング・スペース L-café では、教員の教育・指導のもと同じ大学生（留学生や上級生）が学生に英会話や TOEFL 対策などを教えるスチューデント・ティーチャー制を大学内で初めての試みとして採用している。本稿では、その新しくユニークな試みについて、受講学生によるアンケート調査と教えている学生のインタビューを基に検証した。

アンケート結果分析では学生の ST に対する認識として 5 つの因子を抽出し、更にその中から、学生の英語力実感に影響を与える 2 要因を特定した。5 人の ST へのインタビューからは、レッスンを教え始めた動機や実際に教えてみた感想、今後について等 ST 側からの視点も加え、教わる学生と教える ST 側双方向からの検証を試みている。

キーワード：ソーシャル・ラーニング・スペース、言語カフェ、スチューデント・ティーチャー、ピアサポート

※1 岡山大学言語教育センター

## I. はじめに

岡山大学の L-café とは、平成 21 年に開始したイングリッシュ・カフェ (EC) の活動を受け継ぎながら、さらに広いスペースと学生の自発的な学習態度を啓発するための機能を備えたソーシャル・ラーニング・スペース (注 1) / 言語カフェである。授業以外でも気軽に参加できる英会話の場を提供することにより、学生の英語力や言語学習意欲、国際理解力の向上を目指している。具体的な活動は、留学生との交流、英会話などのレッスン、教員によるオフィスアワー、国際交流イベント、ワークショップなどである。

その中でも、多くの学生に支持されているのが英語のレッスンであり、平成 25 年度前期には 185 名の申し込みがあり、週 22 コマのレッスンを開講、延べ 1,534 名の学生がレッスンに参加した。

本稿は、学生へのアンケートとインタビューを基に日本の大学においてはまだ新しい試みである、学生が同じ学生に教えるスチューデント・ティーチャー制の導入意義についてその検証することを目的としている。

## II. L-café レッスン

### 1 レッスン概要

L-café のレッスンは、登録制の英会話や TOEFL 対策のレッスンと、時間が空いている時に何度でも自由に参加できる、テーマ別のオープンクラスの 3 種類である。どのレッスンも少人数制（多くても 15 人程度）で単位の認定はなく、岡山大学の同じ学生であるスチューデント・ティーチャー (ST) によって教えられている。英会話のレッスンは 3 レベル、15 人までで週 1～2 回。TOEFL 対策はレベルや人数、受講レッスン数の制限はなく、学生の都合とやる気に任せて登録する形式になっているが、平成 25 年度前期は 4 コマ開講された。全てのレッスンは、1 コマ 60 分で 10 週間、出欠は学生個人の判断に任しているが、欠席の際は必ず ST に連絡を入れることが条件である。スペースがある限り途中から参加することも、途中で参加を取りやめることも可能な受講学生にとって、自由度の高いレッスンと言える。一方で「レッスンに参加したい」と思う学生しか出席しない、教える側にとっても好ましい環境と言える。因みに、会話レッスンの出席率は 76.8% (平成 25 年前期) とかなり高く、参加学生の多くはレッスンに真剣に取

り組んでいることがわかる。

また、オープンクラスは、発音や会話、ディスカッション、映画、歌などそれぞれのテーマで1回ずつ独立したレッスンが行われ、その時によって受講する学生が増えたり減ったりするが、毎週決まってやってくる学生や、時間に余裕がある限り一日に複数のレッスンに出席していく学生も珍しくない。

ECの時代から、正規授業時間外でも学生の英語を学びたい、というニーズに応えられるようなシステムづくりを目指してきたが、大学に入学したばかりの1年生だけでなく、英語をやり直したい理系学生、留学や就職を目指す上級生、学会発表や論文のために英語コミュニケーション力をつけたい大学院生など幅広い学部、学年の学生がレッスンに参加している（宇塚 2013）。

### Ⅲ. スチューデント・ティーチャー（ST）制度

#### 1 きっかけ

スチューデント・ティーチャー制度を始めるきっかけは、ECの性質と深く関連しているが、ECレッスンの形式と学生同士学び合いの姿勢の二点があげられる。

一つ目のレッスンの形式については、学生の自主性を最大の特徴とするカフェのレッスンは、そのスケジュールも学生の希望に沿う形で毎学期決定している。具体的には、正規授業のように予め決められたスケジュールがあるわけではなく、申込み学生数が多い時間帯にレッスンを開講している。したがって、正規授業の時間割の都合で、多くの学生が同一時間帯にレッスンを希望している場合、なるべく多くの学生がレッスンに参加できるように配慮しようとする、2つ以上のレッスンを同時開講する必要がある。そして、そのためには教員が一人では対応できなくなり、教員に代わるSTが検討された。

二つ目は、学生達の学び合いの姿勢を推奨する、というソーシャル・ラーニングの実践という視点である。EC開始から1年後にはじめてSTによるレッスンを試験的に開講したのだが、学生によるレッスン評価表の平均点が4.58（5点満点）と非常に高く、肯定的なコメントが多かった。さらに、教えた留学生や上級生からも「引き続き、レッスンを教えたい」「こんなクラスを教えてみたい」と好評であったため、教員と学生という形よりST制をとった方が双方にとって学びの機会となり、ソーシャル・ラーニングを推奨するECにふさわしいシステムとしてであると考

られたので、その後も継続・発展し現在に至っている。

#### 2 STの仕事内容

STの仕事内容（有給）は、大きく分けて二つある。一つは、担当するレッスンを教えることであり、もう一つは、レッスンに関連した質問あるいは、英語学習や留学一般に対してのアドバイスである。

レッスンの第一回目には、教員の立ち会いのもとオリエンテーションを行い、レッスン全般に関するルールやスケジュール等を確認するが、その後は、教材、教え方、クラスマネージメント、個々の学生指導の相談、欠席の際の代行などレッスン全般にわたって、教員とSTが連絡を密に取り合いながら、10回のレッスンを進めていく。まず、STはカフェにある教材あるいは自分の使いたい教材等を利用して、レッスンのプランを立てる。レッスン中は、STからの要望や必要に応じて教員が助け舟を出したり、離れたところからオブザーブしたりすることもあるが、最初の数回を除いて、STの裁量に任されている部分が多い。そして、レッスン後には、STが学生の感想を聞いたり、教員からのフィードバックを基に、各自自分のレッスンを振り返り、以降のレッスンに役立てる、という流れである。原則的には、教員がSTを評価することではなく、STがやってみたいと思う教え方や教材などがあれば、自由に試してみることを奨励している。また、教員からの評価ではなく、実際にレッスンを受けている学生の声に広く耳を傾けることを指導している。それは、レッスンが上手く教えられるか、ということよりも、「その経験自体が学ぶ機会の一つ」としてとらえてもらいたいと考えているからである。また、STには教えることを通して、同じ学生であっても、教えられる側を尊重することを学んでほしい、と考えている。

アドバイジングに関しては、STとしての立場を忘れずに、先輩や一人としてのアドバイスであることを相手にまず理解してもらうことを前提に、個人の良心と知識、経験に任せてアドバイスするよう、ガイドラインを定めている。したがって、個々の内容に関しては、STに任せている。また、わからないこと、答えにくいことに対しては、その旨をはっきり言って教員が代わりに対応する、というルールも決めている。幸いにも今まで4年間でSTが対応に困ったり、深刻なトラブルに陥ったりとうケースはない。なお、レッスンの時間以外でもなるべく学生達と会話をしたり、イベントやワークショップに誘うなど積極的

に学生とコミュニケーションをとることを奨励している。このため、勤務時間には、レッスンの前後の30分～1時間程度が含まれている。

### 3 STの採用基準

STの採用については、留学生、日本人学生共に、教育学部などの教員からの推薦以外では、本人が教えたい、と希望している、あるいは、専門を問わず、将来教員を目指していることが重要な要素となる。それに加えて、英語力があること、さらに、学生としてのリーダーシップやコミュニケーション力など性格的要因も加味している。

英語力に関しては、英語を母語とする留学生はともかく、英語母語圏以外からの留学生の場合は、英語で会話の授業が行えるレベルを目安としているが、日本人学生はさらに具体的に、留学経験があり、TOEIC900点程度というのを一応の基準としている。留学相談やTOEIC等英語学習方法についてアドバイスをすることが仕事内容に含まれていることもあるが、STと学生の信頼関係を築くにあたって、STの英語のスコアはオープンにされている。一般的に、受験英語を経験してきた学生達はスコアに対してセンシティブな面もあるが、L-caféでは、「スコアはいつでも更新できる」、「誰でも努力すれば上げられる」として、特に、学生達の身近なロールモデルとなりうるSTには、スコアを開示するよう奨励している。

また、リーダーシップやコミュニケーション力などに関しては、必ずしも完璧である必要はないが、L-caféでレッスンを教える事を通して、単なる知識の伝達だけではなく、レッスンを導いていく力や伝えたいことを相手に理解してもらうための表現力などを磨くこと目標にし、積極的な態度で臨むSTが望ましい。

L-caféは、「(英語が得意な)学生が自らの経験をもとに、英語を上達させたいと願う学生に教える」という「学生同志の学び合い」を主軸に運営されているので、カジュアルで楽しい雰囲気のレッスンである一方、出欠席は受講学生の自主性に任せているため、レッスンに魅力や意義がなければ、学生が来なくなる、というSTにとっては厳しい環境でもある。このため、もともとある一定以上の教える事に対する熱意や英語力などの基準を満たした学生ではあるが、レッスンを教えながら、更に知識やスキルを磨いていく姿勢も重要となると言える。

## IV. STに対する認識調査

### 1 記述統計量結果

レッスンを受講している学生がSTに対して持っている認識の要因を探索するために、16項目からなるアンケートを用い6件法(1を「全くそう思わない」、6を「全くそう思う」)の回答で調査した。回答得点は、間隔尺度として分析を行った。調査協力者は、非英語母語話者のSTから英語レッスンを受けた学生101名である。

アンケート項目は、これまでに英語レッスンを受講した学生からの自由記述によるアンケート調査や非公式なインタビュー等を参考とし、「STを教員として認識」(項目1-4)「STの教え方に対する評価」(項目5-8)「STから受ける意欲」(項目9-12)および「STへの憧れ」の(項目13-16)4要因を念頭に構築された。

下記表1の16項目のうち、項目2, 3, 6, 8, 12, 13, 14は負の意味を持つ反転項目として構築されたため、尺度得点の6件法をデータ入力の際に反転させた。

表1 記述統計量結果

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1 STの説明は正確で適切だ	3.00	6.00	5.3	.68
2 STだから英語力が十分ではないと感じるときがある	1.00	6.00	5.6	.76
3 STの説明が間違っていると思うときがある	3.00	6.00	5.6	.60
4 STの英語はとても信頼できる	3.00	6.00	5.4	.74
5 STはいつも親身になって教えてくれる	3.00	6.00	5.7	.62
6 STの教え方にムラがあると思うときがある	3.00	6.00	5.5	.82
7 STはいつも一生懸命教えてくれる	3.00	6.00	5.7	.63
8 STの教え方は手を抜いていると思うときがある	2.00	6.00	5.6	.78
9 学生なのにSTになれるなんて、すごいと思う	3.00	6.00	5.6	.69
10 自分も将来STと同じくらい英語が出来るようになりたい	3.00	6.00	5.6	.64
11 STは英語が出来る特別な学生なので、違い存在だ	2.00	6.00	4.7	1.00
12 STは自分とは違い、英語力に恵まれていると思う*	1.00	6.00	4.1	1.51
13 STの期待に応えられないと悲しくなる	1.00	6.00	4.3	1.28
14 STは本当の先生ではないので英語が伸びなくてもST気にしない	1.00	6.00	4.9	1.20
15 STの励ましに応えられるよう、英語をがんばりたい	1.00	6.00	5.3	.92
16 STと一緒に英語を伸ばしていきたい気持ちになる	3.00	6.00	5.4	.77

### 2 因子分析結果

次に、因子分析を行った。抽出手法として最尤法を選び、因子間に相関性があると仮定して、さらに各因子を識別しやすくするために、斜交回転であるプロマックス回転を選択した。下記表2がパターン行列の表示である。

表2 パターン行列の表示

	因子				
	1	2	3	4	5
VAR04	.797	.033	.045	-.047	-.016
VAR01	.755	-.136	.026	.121	.188
VAR03	.750	-.066	-.027	-.083	.048
VAR08	.497	.414	-.074	.049	-.179
VAR14	.345	-.006	.193	-.268	-.223
VAR02	.300	.098	-.033	.003	.173
VAR07	-.192	1.046	.038	-.150	.037
VAR05	-.012	.705	.222	.049	.046
VAR06	.252	.665	-.114	.165	-.007
VAR15	-.096	.077	.868	.092	.042
VAR16	.154	.027	.703	.068	.101
VAR13	-.010	.028	-.230	.625	.023
VAR11	-.035	-.069	.254	.608	-.126
VAR12	-.009	.009	.136	.437	-.094
VAR09	.100	.164	-.023	-.102	.626
VAR10	.065	-.123	.184	-.085	.485

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 7 回の反復で回転が収束しました。

表2のパターン行列によると、受講学生のSTに対する認識には、5つの因子が抽出できたことがわかる。第1因子は、4, 1, 3, 8, 14, 2の6変数で構成されており、負荷量平方和は3.790である。

4, STの英語はとても信頼できる

1, STの説明は正確で適切だ

3, STの説明が間違っていると思う時がある

8, STの教え方は手を抜いていると思う時がある

14, STは本当の先生ではないので、レッスンを受けていても英語が伸びなくても気にしない

2, STだから英語力が十分でないと感じる時がある

これらの変数項目の内容から、第1因子は「STを教員として認識」と名付ける。

第2因子は、7, 5, 6の3つの変数であり、負荷量平方和は1.652である。

7, STはいつも一生懸命教えてくれる

5, STはいつも親身に教えてくれる

6, STの教え方にムラがあると思う時がある

これらの変数項目の内容から「STの教授態度に対する認識」を第2因子とする。

第3因子は、15及び16の2変数からなり、負荷量平方和は1.136である。

15, STの励ましに応えられるよう、英語をがんばりたい

16, STと一緒に英語を伸ばしていきたい気持ちになる

上記2変数より、第3因子は「STから受ける意欲」と名付けられる。

第4因子は、13, 11, 12の3変数から構成され、負荷量平方和は1.259となる。

13, STの期待に応えられないと悲しくなる

11, STは英語ができる特別な学生なので、遠い存在だ

12, STは自分とは違い、英語力に恵まれていると思う

これらの変数項目は、学習者とSTを比べているので、第4因子は「STと自分との比較」とする。

最少因子である第5因子は、2変数からなり、負荷量平方和は.615である。

9, 学生なのにSTになれるなんて、すごいと思う

10, 自分も将来STと同じぐらい英語ができるようになりたい

上記2項目の内容から、STを尊敬する態度がうかがわれ、「STへの憧れ」と名付けた。

### 3 重回帰分析結果

次に、受講学生の英語力実感に影響を与える要因を特定するために「レッスンに参加して英語/TOEFLが伸びたと思う」を基準変数として、因子分析で抽出された5つの因子を説明変数として重回帰分析を行った。

表3 重回帰分析結果

説明変数	B(偏回帰係数)	SE B(偏回帰係数の標準誤差)	標準偏回帰係数(β)
因子I STを教員として認識	.259	.070	.308*
因子III STから受ける意欲	.190	.088	.223*
因子IV STと自分との比較	-.017	.090	-.017
因子V STへの憧れ	.030	.099	.029
因子II STの教える態度への認識	.018	.099	.022
$R^2 = .224^{***}$			

基準変数: 英語力向上実感

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$

表3の標準偏回帰係数βから、第1因子「STを教員として認識」が.308及び第3因子「STから受ける意欲」の.223が数値的には他の3因子と比較すると差があると言える。有意確率が5%以下であれば、「偏回帰係数βが0である」という仮説を棄却することができ、第1因子と第3因子のβが意味を持つ係

数であることが推測できる。したがって、「レッスンに参加して英語/TOEFLが伸びたと思う」という英語力向上の実感には、「STを教員として認識」と「STから受ける意欲」という2つの要因が影響を与えているのではないかと推察される。

つまり、レッスンを受講している学生達は、同じ学生であってもSTを教員として認識しており、STから学習意欲を刺激されることによって、「期待に応えられるようにがんばりたい」「一緒にがんばりたい」という気持ちになると考えられる。このようなSTに対する認識が実際の学習行動に結びつき、結果的には、英語力向上も実感できるのではないかと考えられる。

## V. ST 学生へのインタビュー調査

スチューデント・ティーチャー制度を検証するために5名の非英語母語圏からの留学生と日本人学生へのインタビューを行った。時間は40分～60分程度で、大きく分けて、レッスンを教えたいと思った動機とSTとして同じ大学生を教えた感想についてである。更に、ST制を採用しているL-caféのレッスンの将来についても質問した。5名のSTの特性は以下の表の通りである

表4 STの特性

	名前(仮)	性別	学部・学年	担当レッスン・卒業後の進路など
1	Shin	M	経済・4年	TOEFL・就職
2	Joe	M	工・修士1年	TOEFL・進学
3	Kay	M	教育・4年	会話・教員
4	Yasu	F	教育・3年	会話・教員
5	Tasha	F	教育・研究生	会話・インドネシアにて現職の教員

### 1 レッスンを担当した動機について

まず、英会話或いはTOEFLのレッスンを教えたいと思った動機については以下のような声が上がった。

“僕のこの授業のモチベーションって、生徒が来てくれる事なんで、たくさん来続けてくれて、今学期はほんと嬉しかった”(Shin)

“この仕事は正直しんどいけど、以前教えていた先輩に聞いたら、「私の母校だし、いろんな人にお世話になって留学を果たせたので」という話を聞いて、自分も理系の後輩に留学に行ってほしい、っていう気持ちが出てきた。(留学の)情報を発信できたらいいな、と。知れば、やる気のある、挑戦したい、って

いう人が出てくると思う”(Joe)

“頑張っついで来ようとしている、(略)授業中も教えてる時は上から(先生)目線で教えますけど、一緒に楽しんで、彼らの発言に対して笑ったりしながら(レッスンをしているのがユニークだと思う)”(Kay)

彼らの発言からは、それぞれのSTによって教えたいと思う理由は違うが、後輩や同輩を応援したいという強い気持ちが共通しており、それが教えるモチベーションになっていることがわかる。

### 2 レッスンを教えることについて

次に、同じ学生でありながら、L-caféでレッスンを担当すること自体について率直な意見を聞いてみたところ、以下のような答えが得られた。

“自分の英語力不足を実感して、必死、必死でやってるんですよ”“本当にこれで(みんなの)英語力が伸びるかな、とか悩みつつ”(Yasu)

“Although it seems I am relaxing. I still feel the challenges”(Tasha)

“B+ぐらいですね。学生から良い評価をもらおうと嬉しい”“教えてほしいと希望があれば、僕は全力で教えますけど、何も求めてこないのであれば、僕はほっておきますね。食らいついてくるぐらいの子じゃないと、(留学はうまくいかない)”(Joe)

“自信を持って教えるのって、すごい大事だと思っているし、少しでも先生があたふたと教えていたら、教えてもらう側のモチベーション下がるんですよ。前もって準備して、堂々と教えていたら、学生側もすごいモチベーションが高まると思う”(Shin)

実際にプロとして教えた経験のあるのはTashaのみであるが、経験の有無や将来の方向性に関係なく、STが学生達と真剣に向き合っていると見えよう。そして、自分なりの「教える」目的や理想の姿を明確に持って、その実現に向けて努力していることが伺われる。

### 3 学生との距離感について

STの大きな特徴の一つは、教えられる側と教える側の距離の近さがあげられるが、これに関してSTたちはどのように感じているか意見を求めた。

“(大学の)先生の授業をちゃんと聞いてなかったことがバレるんじゃないか、評価されることにつながるんじゃないか(と違って質問をしづらいが)STは歳が近い先輩っていうのもあるので、わからないのを気持ち的に理解してくれるんじゃないか、っていう安心感はあると思います”(Yasu)

“I don't have boundaries, like they don't call me "Tasha-sensei"“(students) have more emotional connection to ST”(Tasha)

“学生が頑張って授業しているのを見て、眠くならないっていうか、頑張って聞こうかな、と思った“(留学先グアム大学での経験より)”“先生ですけど、僕もわからない時はわからないって言いましたし、先生と先輩の間ぐらい。先生よりも近い存在なんで、親近感がわくし、その人から言われたらがんばろう、って感じになるのでは(先生よりは)?”(Kay)

インフォーマルな友達間のグループ学習などの場合を除いて、同年代の学生を対象に正式に雇用されて英語を教えた経験があるSTはおらず、どの学生も教え始めてから一年未満である。経験の少なさや日常的には、教える相手と友達関係であることを考慮すると、同年代の学生に教えることはそれ特有の難しさも考えられる。レッスンは始まったばかりの時は、自分より年上の大学院生や社会人学生にどう接したらよいか躊躇する姿も時々見受けられた。しかし、学期が終了した時点で行われた今回のインタビューでは、すべてのSTが学生との距離が近いことを利点としてとらえていることが分かる。

#### 4 今後について

最後に、レッスンやST制の将来の方向性について尋ねてみた。

“Although it's not really academic things or we cannot really assess their score or anything, in terms of motivation, I think (L-café lesson) is a good start. It boosts their confidence to speak up.”(Tasha)

“TOEFLは一人で勉強するのは難しくて、それを(仲間と)一緒にがんばる時間があるっていうのが一番大きい”(Shin)

“教える質と量をどう確保するか”, “大学の授業みたいに最優先にはできないので、もっと受けやすく、参加できるようにオープンソース化するか”(Joe)

STの声をまとめると、今後の課題として、レッスンの効果をどう計るか、クラスの質を落とさずによ

り多くの学生のニーズに答えるためにはどうしたらよいか、などがあげられる。

## VI. 結語

本稿では、ソーシャル・ラーニング・スペース/言語カフェ、L-caféで採用している新しいST制度を検証するために、レッスンの特徴やSTの仕事内容、採用基準を踏まえた後、教わる学生のSTに対する認識やその英語力実感に影響を与える要因、更には、教えるST側からの率直な意見について紹介してきた。

アンケート分析とインタビュー結果から見えてくる学生が学生に教えるST制度とは、次のことがあげられる。

1. 教わる学生にとっては、STは同じ学生であっても、その英語力や教え方など"先生"として認識している。更に、STに背中を押してもらうことで英語力向上が実感できている、と考えられる。
2. 教える側のSTにとっては、"後輩を教えたい"という思いがモチベーションとなり、学生と真剣に向き合う姿勢が感じられると共に、学生とSTとの距離の近さがL-caféレッスンの利点として挙げられる。

つまり、ST制度はユニークで学生の学習意欲を高めるために効果的な学び合いのシステムの一つと言える。また、今後の課題としては、以下の3点があげられる。

1. STの資質を備えた優秀な学生の採用や育成
2. レッソンの効果をどう測るか
3. レッソンの質を一定に保ちながら、より多くの学生のニーズに答えるために量をどう確保するか

以上、ST制度について検証を行ってきたが、今後の研究課題として、いくつか提言することができる。学生のSTに対する認識の5因子とその学習効果についてTOEFLスコアなどを用いて客観的かつ具体的な関係性を探る必要がある。また、STのインタビューから得た情報を基に受講学生への追跡調査をすることによって、STと学生間のコミュニケーションの深さを測ることもできるであろう。さらに、正規の授業を担当する教員と学生間のコミュニケーションと比較検証することができる。今後もST制度の更なる発展を目指して検証を深めていきたい。

注1 ソーシャル・ラーニング・スペースとは、ソーシャルアクティビティを通じて、学生同士がお互いに学びあうスペースを指す。(Murray & Fujishima 2013) また、Lomsa & Oblinger (2006)は「学ぶということは、ソーシャルな過程の一つであり、今日の学生達にとっては、集まって話ができる場所ならその多くが、勉強したり、協力作業をしたり、友達関係を築いたりをするスペースになる」と指摘している。

#### 参考・引用文献

宇塚万里子 (2013) 「イングリッシュ・カフェ 実践報告：4年間の軌跡とその成長についての考察」岡山大学教育研究紀要9

Lomas, C., & Oblinger, D. (2006). Student practices and their impact on learning space. In D.G.

Oblinger (Ed.), Learning spaces. Washington, DC: Educause.

Murry, G., & Fujishima, N. (2013) Social language learning spaces: Affordances in a community of learners. Chinese Journal of Applied Linguistics 36(1), 147-150

本稿は、平成25年9月20日岡山大学にて開催された第16回桃太郎フォーラムにて行われたシンポジウム分科会「アクティブ・ラーニングをサポートする様々な取り組み」において行った発表「学生が自発的に参加するL-café英語レッスンの意義とその役割：学生が学生に教える『スチューデント・ティーチャー』システムについての検証」の原稿を大幅に加筆・修正したものである。

---

Title: Examining the Student Teacher System at the Social Learning Space, the L-café

Subtitle: Students' Perceptions of Students Teachers and ST Experience of Peer Teaching

Author: Mariko UZUKA\*1, Junko OTOSHI \*1

#### (Abstracts)

In May 2013 the Social Learning Space, the L-café opened at Okayama university and it has offered English conversation and TOEFL preparation classes to students by adopting the student teacher (ST) system. Under this system all classes are taught by international or Japanese student who have studied abroad.

In this essay, we try to examine this unique and rather new teaching system at university by analyzing both quantitative and qualitative data; a survey of students' perceptions about ST and interviews with ST about peer teaching. We abstracted five factors in students' perceptions about ST from the survey and conducted additional analysis on how they related to students' perceptions of their language improvement. In addition to this, we conducted interviews with five ST and further examined on the student teacher system from both the teacher and student perspectives.

Keywords: Social Learning Space, Language Café, Student Teacher, Peer Teaching,

\*1 A Language Education Center, Okayama University

---